

研究彙報

第十四号

特定領域研究

「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築——象徴系と生態系の連関をととして——」
“自然資源の認知と加工” 研究班報告

2006年10月 発行

研究彙報第十四号刊行にあたって

平成17(2005年) 年度第1回研究会は、2005年7月鳥取大学で遊牧民と資源の問題を特集しておこなわれた。2005年4月に沖縄大学地域研究所から鳥取大学地域学部にも助教として赴任された家中茂さんにお世話になった。アフリカの遊牧民について河合香史さん(東京外国大学アジア・アフリカ言語文化研究所・助教)に、モンゴルの遊牧民について上村明さん(東京外国語大学)に発表していただき、私が西南アジア遊牧民について話し、北村光二さん(岡山大学文学部・教授)にコメンテーターをお願いした。

河合さんの「家畜キャンプの移動をめぐる行為選択と隣接集団」は、もっぱら腸占いによる襲撃についての人びとの了解や対処についての詳細な分析であった。解体された家畜の内臓の様態、その特徴についての人びとの語りや討論、それにもとづく行動の各階梯について、それぞれに固有の記述の困難があり、単純な因果の連鎖とならないそれら相互の関係についてはなおさらで、コメンテーターの北村さんの指摘する、アフリカの農耕・狩猟採集民と対比しての牧畜民の認知上の特異性のようなものが十分に説得的に開示されたわけではなかった。むしろ、アントニオ・ネグリ風にいえば、この「帝国」の戦争の時代に、その典型であるスーダンとエチオピア、ソマリの内紛地帯にはさまれて、なおかつこのような独自のレイディングへの対処がなされていることの奇異に、多くの参加者はうたれたのではなかったかと思われた。

上村さんの「ポスト社会主義時代のモンゴル国における牧畜経営と牧地利用——西モンゴルの事例より——」は、モンゴル遊牧民の生活の変化を社会主義時代からの経済自由化の経過のもとに追い、その牧畜が社会変動の波のなかでどのように変容再編されているかを分析しようとする、現在進行形の仕事をとりまとめたものであった。これは一方において、高倉浩樹さん(東北大学東北アジア研究センター・助教)がサハで着実に成果を収めておられる「社会主義の民族誌」につながる研究であり、もう一方では、政治経済体

研究彙報

第十四号

2006年10月27日 発行

特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築——象徴系と生態系の連関をととして——」
計画研究「自然資源の認知と加工」(課題番号14083202 代表・松井 健・東京大学東洋文化研究所・教授)

連絡先

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 松井研究室

電話 03-5841-5872 FAX 03-5841-5897

E-mail hugeo@loc.u-tokyo.ac.jp

ポスト社会主義のモンゴル国における牧畜経営
—開発モデルと遊牧の実践—

上村 明（東京外国語大学・非常勤講師）

はじめに

モンゴル国の牧畜経営は、社会主義時代も共同組合経営というモデルによる開発を受け入れたと考えれば、20世紀半ば以降つねに外国からの開発モデルの導入という環境のなかで営まれてきたといつてよい。ソ連経済とコメコン体制の崩壊以降は、IMFや世界銀行を筆頭とする国際機関や日本などの援助国の援助を受け入れ、その意思にそった「改革」をすすめてきた。その目標は、1990年代初めは旧社会主義時代の「計画経済」から「市場経済」への移行が前面におしだされていたが、1990年代半ばからは「安定した経済成長」とならんで「貧困」「環境」に重点がおかれるようになった。

1990年代初めの市場経済への急激な移行の過程で、モンゴルの牧畜は、失業者を吸収する受け皿の役目をおった。社会主義時代の社会サービスの廃止などで職を失った彼らは、ネグデル¹⁾ 解体時の家畜の私有化によって家畜を手にいれ、あたらしく牧畜民になったのである。このことは、少数の家畜しかたないおおくの牧畜民世帯が発生することを意味した。さらに、こうした牧畜民がゾドとよばれる冬の自然災害により甚大な被害をこうむったこと、また都市部に集中する開発によって生じた地域格差緩和のため、おおくの牧畜民が「貧困緩和」の重要なターゲットとされていった。

開発援助において、牧畜民の「貧困」は、「環境」とむすびつけられて考えられてきた。「環境」とは、すなわち牧地のことである。国際機関は、1990年代初めの古典的なハーディンの「コモンズの悲劇」テーゼにもとづいた、牧地環境保全のための私有化論理を後退させ、かわりに「コミュニティを基盤にした土地利用管理」‘community-based land management’を開発のモデルとして提唱するようになっていった²⁾。これは、アフリカでの牧畜開発の失敗を教訓として、牧地は、私的所有によってよりも、「コミュニティ」による共同管理つまり「コモンズ」としたほうが、より持続的・生産的に利用できるというものだ。それが有効に機能するためには、「コミュニティ」の安定性や成員の均質性が必要であり、「貧困」はそれを阻害するとの認識がある。

しかしながら、その「コミュニティ」モデルは、モンゴルの牧畜民たちの実態にかならずしも対応せず、しかも、あたらしく制定された土地法では、冬・春営地管理の主体である「コミュニティ」として、ホトアイル³⁾ とよばれる時間をおってその構成が変化する牧畜集団が設定されている⁴⁾。一方で、その「コミュニティ」モデルを批判する側も、例えばホトアイルの構成にあらわれるような、モンゴルの牧畜経営のflexibilityをどうとらえるか、じゅうぶんに議論してこなかったといえる。

そこで、ここでは、上記の「コミュニティを基盤にした土地利用管理」に関わるモンゴル牧畜民社会における「コミュニティ」についての議論をまとめ、ホトアイルの構成をどうとらえたらよいか考えてみたい。

「コミュニティ」をめぐる議論

まず、「コミュニティを基盤にした土地利用管理」の中心的な理論的推進者であるR. Mearnsと、その批判

University of Michigan Press.

Abbink, J., 1993. Reading the entrails : analysis of African divination discourse, *Man* (N.S.) 28 : 705-726.

Dyson-Hudson, N., 1966. *Karimojong Politics*. Oxford : Oxford University Press.

Gulliver, P. H., 1975, Nomadic Movements : Cause and Implications. In : T. Monod (ed.), *Pastoralism in Tropical Africa*, Oxford : Oxford University Press. pp. 369-386.

Lamphear, J., 1976. *The Traditional History of the Jie of Uganda*, Oxford : Clarendon Press.

1992. *The Scattering Time : Turkana Responses to Colonial Rule*, Oxford : Clarendon Press.

McCabe, J. T., R. Dyson-Hudson, and J. Wienpahl, 1999. Nomadic Movements. In : Little, M. A. and P. W. Leslie (eds.), *Turkana Herders of the Dry Savanna : Ecology and biobehavioral response of nomads to an uncertain environment*, Oxford : Oxford University Press Mkutu, 2003.

Thomas, E. M., 1965. *Warrior Herdsmen*. London : Secker & Warburg. (トーマス、E・M 1979『遊牧の戦士たち』向井元子・田中二郎訳、思索社)。

伊谷純一郎 1980 『トゥルカナの自然誌—呵責なき人びと』雄山閣。

1982 『大旱魃—トゥルカナ日記』新潮社 (新潮選書)。

河合 香吏 2002 「『地名』という知識—ドスの環境認識論・序説」佐藤俊編『遊牧民の世界 (講座生態人類学・第4巻)』京都大学学術出版会 pp.17-85。

2004 「ドスにおける家畜の略奪と隣接集団間の関係」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊牧民 (ノマッド) —アフリカの原野に生きる』昭和堂 pp.542-566。

2006 「キャンプ移動と腸占い—ドスにおける隣接集団との関係をめぐる社会空間の生成機序」西井凉子・田邊繁治編『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社 pp.175-202。

北村 光二 1996 「身体的コミュニケーションにおける『共同の現在』の経験—トゥルカナの『交渉』的コミュニケーション」菅原和孝・野村雅一編『(叢書・身体と文化第2巻) コミュニケーションとして身体』pp.288-314。

2002 「牧畜民の認識論的特異性—北ケニア牧畜民トゥルカナにおける『生存の技法』」『遊牧民の世界』京都大学学術出版会 pp.87-125。

2003 「『比較』による文化の多様性と独自性の理解—牧畜民トゥルカナの認識論 (エピステモロジー)」、田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊牧民 (ノマッド) —アフリカの原野に生きる』昭和堂 pp.466-491。

作道 信介 2003 「北西ケニア・トゥルカナにおける新しい病気カテゴリー『糞肛門』ewosinangacinの出現—社会変動と病気」弘前大学人文学部医療化社会研究会編『医療か社会の思想と行動 (Ⅱ)』pp.15-37。

2004 「トゥルカナにおける他者の『怒り』—対処としての占い」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊牧民 (ノマッド) —アフリカの原野に生きる』昭和堂 pp.492-514。

西井凉子・田邊繁治編 2006 『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社。

福井 勝義 1987 「ウシ牧畜民ボディ族の遊動に関する考察—首長の遊動放牧集団の事例から」pp.471-513『牧畜文化の原像—生態・社会・歴史』日本放送出版会。

註

1) 集団間関係の推移は、次のようであった。すなわち、ジエとは1981-1993年は友好・非敵対であったが、1994年に大規模なレイディングを機に、それ以降は敵対関係が続いている。スーダンのディディングとは1980-1992年は敵対関係にあったが、1993年、和平 (ekisil) が成立して現在に至る。同じくスーダンのトボサとは、おおむね友好・非敵対であり、大規模な襲撃は抑制されている。マセニコとはおおむね友好・非敵対関係が続いている。1980年および2000-2001年にマセニコは他の集団との連合軍に参入した。ケニアのトゥルカナとは1984年以降、敵対しており、和平が長続きしない。

2) ドスは直線的な時間軸としての暦をもたず、また西暦にもとづく時間把握にも熱心ではない。おのおのの年は旱魃やその年に起きた事件などにもとづいて記憶され、表現される。

3) 東アフリカ牧畜民は家畜の略奪を狙った襲撃の応酬により、古くから「好戦的な牧畜民」の民族誌的ラベルを貼られてきた。トーマスによるドスの民族誌のタイトル *Warrior Herdsmen* はこれを端的に記している [Thomas 1965]。最近ではAK四七型自動小銃の流入によってレイディングが武装化・過激化に向かってきたことが指摘され、国家や地域、グローバル世界等との関係において語られる傾向が強い [Mirzeler & Young 1998, Gray 2000, Fleisher 2000など]。

4) レイディングは武装集団を組織して放牧中の群れを水場や放牧地で待ち伏せしたり、家畜キャンプや集落を取り囲んで襲撃する「攻撃型の略奪 (ajore)」だけでなく、放牧中に群れからはぐれた数頭を連れ帰ったり、夜間に家畜囲いに侵入して家畜を連れ出すといった「窃盗型の略奪 (aonyo)」もある。ドスランド全域におけるレイディングの被害件数は一カ月に五件以上を数え、きわめて頻繁に起きる [河合 2002, 2004]。

5) ウガンダでは、アミン時代とその後の混乱期を通じて、また1986年の現ムセヴェニ政権樹立後も、カラモジャ地域におけるセキュリティには基本的に自衛策がとられてきた。それは、いわば「自分のウジは自力で守れ (国はこれに関与しない)」とする牧畜民同士のレイディング合戦に対する野放しの政策であり、こうした政策が銃の所持を増加させる結果を招いてきたと考えられる。

6) 武装解除政策の実施前後におけるドスの対応については河合 (2002) に触れた。

7) ドスランドは標高1300-1700メートルの丘陵地がその大部分を占め、西部には低湿地草原、南部はジェランドに続くなだらかな平坦地、北東部にはエスカーPMENTにそって2000メートルを越える稜線が連なる。その土地利用からドスランドは丘の中腹や麓に点在する集落とその周囲に展開する農耕地、および集落や畑のない放牧地とに区分できるが、家畜キャンプは一般に集落から離れた放牧地に設営される。

8) ドスは塩分を家畜の成育に不可欠の栄養素ととらえている。エレット (elet) と総称される草^マや、エンゲレイ (engelei) と呼ばれる土は塩分を含むとされる。モルエセには沢の岸壁が深くえぐれてエンゲレイの露出している場所がある。

9) トゥルカナの預言者 (ドスと同じく *emuron* と呼ばれる) については、Lamphear (1992) が植民地政府等の外的圧力に対する抵抗において預言者が指導的な役割を果たした経緯を詳しく追っている。同じくトゥルカナの預言者による治療行為は作道の一連の研究に詳しい [作道 2003, 2004など]。

10) 腸占いは *akisym ngamoliteny* といい、「腸 *ngamoliteny* を調べて確かめる *akisym*」と表現される。

11) 本来であれば、このプロセスを構成する諸事項を列挙し、キャンプを設営してから移動にいたるまでの期間にキャンプにもたらされたニュース、預言者からの指示、供犠が実施された経緯、メンバーが関与した事件や出来事などを、腸占いの啓示内容にも踏みこみつつ、継時的にたどる作業が残されているのだが、紙幅の関係にて、移動に至るまでの詳細な記述は省略せざるを得ない。詳細は河合 (2006) を参照のこと。

者としてMaria Fernandez-Gimenezの議論をとりあげてみたい。Mearnsは、アフリカの牧地環境について研究してきた多くの実績のある研究者であり、現在は世界銀行の東アジア太平洋地域担当自然資源管理上級専門家である。

Mearns (1996) は、共有財産の管理 (the management of common property regimes (CPRs)) がどのような条件の下でうまく行くか、協調行動 (collective-action) と処理コスト (transaction cost) のモデルを用いて、モンゴル国の牧地のケースを検討している。

自然資源の持続的利用で問題なのは、資源の適度な利用という協調行動を生み出すための合意にいたる交渉コストなどの処理コストである。コミュニティの内部では、処理コストは低く抑えられ、協調行動が起こりやすくなる。コミュニティのもつ、信念や嗜好の共有、ある程度固定した成員、成員間の交渉が継続するという期待、直接的で多面的な関係といった属性が、それを可能にするからである (p.301)。自然資源は、コミュニティによる共同管理をつうじて、つまり「コモンズ」として、効率的な持続的利用が可能であるが、その質はうえにあげた属性がどのくらい保持されているにかかるといえる。

Mearnsは、1990年代初めのネグデル解体以降のモンゴル国における牧畜社会のコミュニティについて、ネグデルによって抑え付けられていた自発的協働が復活する一方で、コミュニティの属性は弱まりつつあるとつぎのように分析する。

都市志向の新参者の流入、不在家畜所有者の発生、貧富の格差の拡大によって、地方のコミュニティ内部の家族間の関心が多様化し、牧民たちの信念や嗜好を共有する度合いが低下する傾向にある。コミュニティの成員はもはや安定しているとは見え、マクロレベルの政治的・経済的な変動によって生み出される不確実な空気が広まり、牧民同士の関係が継続するという期待を近い将来についてさえも失わせている。(Mearns 1996 : 331)

つまり、新参者の流入や貧富の格差の増大が、コミュニティの成員の安定性や同質性を侵食し、協調行動をとるのを阻害しつつあるというのである。

これに対し、Fernandez-Gimenez (1999a) は、バヤンホンゴル・アイマグの調査をもとに、コミュニティの外にいるというその性格により、不在家畜所有者は牧地の適正な使用を阻害するものだとする一般的な理解に、異論をとなえる。現在のモンゴルの不在家畜所有者のほとんどは、ちかしい血縁者や友人に家畜を託しているのであって、契約にしたがって報酬を支払うアフリカなどでみられる事業家や投資家の不在家畜所有者とはことなると論ずる。ネグデルの解体によって家畜を手に入れた定住地居住者のなかには、田舎にでてフルタイムの牧民になったものもいるが、定住地にのこったものもいる。彼らが、自分たちの家畜の世話を、田舎で牧畜をいとなむ家族や縁者に託しているケースがほとんどなのである。その報酬は、定住地でしか手に入らない商品や移動の際の車の手配、学校に通うこどもを預かったり、牧繁期の人手を提供したりという、ネグデルがはたしていた牧民と定住地とをむすびつけるサービスの提供である。また、不在家畜所有者の存在は、現場で牧畜にたずさわる世帯の数を減らし、トラックなど移動の手段を牧民に提供するなど、牧民の移動をむしろ助け、牧地の適正使用と保護を促進するとしている。新参者の流入や貧富の格差の増大がコミュニティの同質性を侵食しているというMearnsの認識を調査によって検証し、これらの現象は牧民たちのもつ規範の同質性に影響していないと結論づけたのである。

また、風戸 (2002) も、上の議論にはふれていないが、新参の牧畜民に対する否定的な評価について、ひとりの人間が一生のなかで定住地と牧地とを行き来しつつその両方に住むことはめずらしくないこと、また定住地と牧地に親族がわかれて住み、両者のあいだにふかい協力関係があることを指摘し、かならずしも新参者に牧畜の技術や知識がないわけではなく、価値観もネグデル時代からの牧民と大きなかわりはないことを、

フィールド調査から結論づけている。

これらの研究は、「コミュニティ」による牧地管理というモデルそのものの有効性を直接問題にしているわけではないが、定住地の住民と牧民とのネットワークのダイナミクスなど、現実には起こっている現象をその場で観察することによって、牧民たちの生きる社会を、外部から閉ざされ安定した系としての「コミュニティ」としてとらえる見方のほころびを明るみに出しているといえる。

Mearns自身も、Mearns et al. (1998) のなかで、外部から明確に区別される安定した「コミュニティ」モデルを、均衡的エコシステムのモデルとのアナロジーで批判している。

均衡的システムとは、「対象となるシステムの外部の条件が、時間が経過しても比較的安定しているので、システム内部のプロセスは、そのまま継続するか均衡し、システム内部のプロセスによって、システムの構造とダイナミクスが統御可能」なシステムである (Ellis et al. 1993 : 31)。牧地環境にあてはめると、均衡的エコシステムでは、外部の条件つまり降雨量が毎年ほぼ一定しているので、牧地環境の状態は、そこで採食する家畜の数によって決まる。また、そのような環境では、「環境容量」に近いがそれをこえない数の家畜を維持することが、牧畜経営の戦略となる。これは、従来から一般的な牧地管理のモデルである。

それに対し、非均衡的エコシステムでは、草の生産量に直接影響する降雨量が毎年おおきく変化するので、牧地環境の状態は、家畜の食圧 'grazing pressure' によってというより、むしろ降雨量によっておおきく左右される。このような牧地環境では、ある牧地に適正な家畜の数つまり「環境容量」の概念は、あまり意味をなさない。そして、牧民にとっては、空間的な降雨量の偏差をとらえて、草がよく生えている場所があれば、そこに移動するという機会主義的戦略が適合する (Behnke & Scoones 1993)。これは、アフリカの乾燥地帯やモンゴルの大部分の牧地によく当てはまるモデルである⁵⁾。

外部の条件の影響を受けない閉じて安定した系としてイメージされた「コミュニティ」は、均衡的エコシステムにならない、「均衡的コミュニティ」と名づけることができよう。Mearns et al. (1998) は、それまでの政策アプローチが、均衡的コミュニティと均衡的エコシステムを所与のものとして、この2つをリンクさせてイメージしていたと批判する。

Fernandez-Gimenez (2002) は、「均衡的コミュニティ」モデルでは、経営の柔軟性と土地権の保障が、両立できないパラドックスとして必然的に立ち現れてくると論ずる。一般に、コミュニティの空間的・社会的境界を明確にすることが、土地権を保障し、したがって自然資源の管理がうまくおこなわれるために不可欠だと信じられているが (p.51)、モンゴルでは、コミュニティ境界を明確化するには、つぎのような困難があるとす。①多様で、重層的かつ偶発的な資源を牧民が利用し、②資源の境界も本質的に曖昧でたえず移動しており、③資源を利用する牧民も多様で重層的な集団を構成し、④潜在的使用者を排除しない資源利用倫理を共有していることである。このような移動性・柔軟性・互酬性が、コミュニティ境界の明確化によって損なわれかねないからである (p.60)。

この「均衡的コミュニティ」モデル批判の議論は、閉じた系として対象社会を民族誌に記述することに対する批判とも重なるものである。また、自己完結した「文化」概念によって、ホスト社会をはかとは明確に区別しうる実体として表象する「文化相対主義」に対する、本質主義、「オリエンタリズム」の批判にも通じる。実体として表象された社会は、絶対的なヘゲモニーをもつ「西洋」によって、その表象をつうじて操作の対象とされると考えられるからだ。

「コミュニティ」の問題、とくに土地利用と「コミュニティ」の問題を考えるにあたって、日本でなされてきた議論、とくに土地所有について人類学的視点からの論文集 (杉島 1999a)、環境と人間との関係をマイナー・サブシステムという概念で論ずる松井健の研究、それとおおきな接点をもつ日本のコモンズの社会学は、おおいに参考になると思う。

杉島 (1999a) は、まず所有の概念にもとづく「土地所有制度」と、所有の概念ではとらえることのできな

い「土地制度」とを区別する。所有権とは結局のところ処分権であり、「所有こそが身体やそのはたらき（労働）に対する認識に浸透し、それを基礎づけているのである。所有の概念は資本主義の基底にある商品交換と不可分である。……所有とは商品交換に参与する者が自分の商品に対して関係する行為である。」(1999b: 16-17) というように、土地所有と資本主義は不可分であり土地所有とは即土地の商品化である。(土地がどのような意味で「処分」できるかという問題意識は、知的財産権の問題や臓器売買などの身体の商品化にもつながっていくものだ。)そして、土地所有という概念が、植民地統治や開発によって、アジア太平洋地域の社会にどのように導入されたかを、「歴史のもつれあい」という視点で記述しようとする。これは、開発する側、開発される側のさまざまな主体（agency）が、歴史的状況のなかでネゴシエーションする過程と言い換えてよいだろう。

松井のいうマイナー・サブシステムとは、「経済的な意味はごく小さいものの、単純な技術を用いて、それゆえもっとも高度な技法（わざ）を駆使して、自然のなかに立ち入っておこなわれることが多い、季節的にごく限定された生業活動のひとつ」（2004: 112）である。それは、「言語化され意識化され説明されうる水準よりも深いところで」了解され行なわれる「きわめて身体的な、自然のなかに身体をおき身体を媒介とした」行為であり、それゆえ「身体全体をとして自然との直接的なかわりを体験させ、その時その場所において、深く自然に包まれていることを体感させるという点で、さらに突出した意味を記憶の沈殿の深層にもたらす」（松井 1998a: 168-170、家中 2001: 86-87）ものという。この意味で、モンゴルではメジャーな生業である牧畜の作業と共通する。

さらにいえば、人間の日常のすべての行動は、このような側面をもつ。家中（2002）は、「生活の知識というものが、個別の対象や状況と独立して蓄積されたり一般化されることなく、あくまで『かわりのなかで』すなわち『歴史的ストック』としてある」（p.91）と説く。

家中（2002）や松井（2004）が示唆するように、モンゴルの牧地の共同利用権も、土地への働きかけの痕跡の総体としての「歴史的ストック」を根拠に発生するものであろう。人々の働きかけが刻みこまれる「歴史的ストック」は、人の記憶であっても、身体であっても、景観（landscape）であってもよい。ある景観によって、ある人間がそこに働きかけていたという人々の記憶が喚起され、土地利用権の根拠となるのである。だから、働きかけの程度によってその強度に濃淡ができるし、「時期や対象に応じて土地利用が排他的であったり共有的であったりする」（家中 2002: 88）ことにもなるのである。ここが、「一物一権主義」、白黒がはっきりした近代的な所有観とは、ことなるという（同）。

家中（2001）は、石垣島白保のイノーの海が、住民によって守らなければならない「コモンズ」として「生成」される過程を論じている。イノーの海での採集や漁といったひとびとのマイナー・サブシステムの活動によって蓄積された「歴史的ストック」としての記憶が、開発をきっかけに意識化され言語化され、開発に対抗する「住民の総意」に結晶したと論ずるのである。

しかし、このような「生成するコモンズ」が、開発にかならず対抗できるとはかぎらない。水島（1999）は、地域開発によって開発側と住民に紛争が生まれ、争点が土地の法的な所有権になった場合、住民側は、プラグマティックに（あるいは戦略的本質主義的に）、土地の住民による共同所有を主張することで、法的に有利な展開をつかむことが可能だが、その共同所有は理念的に創造されるだけでなく、近代の産物そのものである、同じ近代の産物としての開発を標的にはできないという（p.454）。では、コモンズによって開発に抵抗はできるのだろうか？ さらに、「守り・管理するコモンズ」という発想も近代のものではないのか、コモンズが生成される過程で「歴史的ストック」としての記憶やそれまでの土地利用のしくみも変質してしまうのではないのか、また開発をきっかけにできた「コモンズ」がその契機がなくなってもずっと存続する保証はあるのかなどなど、さまざまな疑問がうかんでくる。しかし、いくつかの論点をまとめておきたい。

ひとつは、土地への権利の根拠が、人が自分の体をとおして土地に働きかけることで刻まれる景観や身体

や記憶の総体である「歴史的ストック」であると論ずることである。ふたつめは、土地所有制度が導入される過程は、さまざまな主体（agency）が歴史的状況のなかでネゴシエーションする過程であるという視点である。また、家中のいう「コモンズ」が、土地への働きかけの「歴史的ストック」をもとに、ネゴシエーションのなかで、それを管理する主体の成立とともに「生成」されるということである。

ここでagencyという言葉でイメージするべきなのは、自己意識によって首尾一貫する近代的な主体なのではなく、さまざまな関係が束ねられている関係性の結節点としての「主体」である。関係性とは、具体的なものやひととの交渉が場所や身体にきざむ痕跡の蓄積によって構成される場の力のようなものだろう。痕跡の蓄積、というより刻まれた溝が深まるとともに、それにそって交渉がおこなわれやすくなり、さらに痕跡が深く刻まれる。つまりプラクティス（慣習的实践）である。

このように、さまざまな関係が束ねられている関係性の結節点として「主体」（agency）をとらえることは、人間だけでなく、組織や集団にも、つまりはホトアイルにも同様に可能であろう。

モンゴルの牧畜経営の柔軟性—「ホトアイル」の再検討—

うえに書いたようにホトアイルをとらえることは、「非均衡的コミュニティ」がどう構想されうるかを考えるてがかりになると思う。また、モンゴルにおける牧畜経営の柔軟性を理解するためにも役立つ。

ホトアイルは、2から多いときで10ほどの世帯で構成される牧畜の基本的な社会・経済的単位とされる。さまざまな牧畜作業、とくに毎日繰り返されるヒツジ・ヤギの放牧を、複数の世帯で共同でおこなうことにより、労働力が節約できる。ヒツジ・ヤギをひとつの群れに統合すれば、各世帯がそれぞれ毎日出さなければいけなかった羊番を、持ち回りで出せるようになるからである。その構成は、時間によって変化しうる。つまり、移動した先の营地ごとで、構成しなおされる。独立した住居と財産（家畜）をもつ世帯が、そのときどきの牧地の状態や家畜の規模・構成に応じて、臨機応変にホトアイルを構成し解消するのである。しかし、各世帯のヒツジ・ヤギの群れを統合した合計が1000頭をこえるとひとりの羊番がひとつの群れとして放牧するのが困難になる。この群管理の技術的限界が、ホトアイルの規模を制約する。

ホトアイルには、どのような関係が束ねられているのであろうか？ われわれの目の前にホトアイルがあるとすると、まず、そこに集められた家畜たちそれぞれには、誰が処分することができるか、つまり誰が所有しているかという関係が、特定の人間とのあいだに張られている。この関係は、まずほとんどの場合ある個人とのあいだに、あるいは世帯やまれに組織とのあいだに排他的にむすばれている。これを「所有関係」とよぶことにする。もちろん家畜以外の牧畜につかわれる用具やその他の品々にもこの関係があるが、とりあえず家畜の関係に着目する。家畜の所有関係が束ねられることをつうじてひととひとがむすびつき、財やサービスの交換がおこなわれる。つぎには、家畜をどこの牧地にだすか、水場にいつ連れて行くかといった、さしあたっての家畜の管理からはじまって、さまざまなスパンやレベルにおいて家畜の管理を決定する人間との関係、これをせまい意味での「経営」と考え、「経営関係」と呼ぶことにする。これは、ホトアイルのなかで牧畜に一番経験の深いものがすべてを決める場合もあるし、現場の人間の裁量にまかされる場合もあるが、基本的に、暗黙の了解や共通の知識、また話し合いによって形成される、ホトアイルを構成する世帯の合意のもとでおこなわれているとかがえてよい。さらに、家畜管理の作業を実際に行う人間との関係、これを「労働関係」と呼ぶことにする。

ホトアイルでなによりさきに目にはいるのは、数メートルから10数メートル間隔で建てられたゲルだろう。ゲルには、おおくの場合いわゆる核家族が住む。居住というひとと土地との関係が集約されているゲルが、さらにそこに束ねられている。これを、「居住関係」と呼ぶことにする。ひとやものの流れから、そのゲルの

なかからそとに広がる「親族関係」も見えてくる。

これら、ひとと土地、家畜と土地との関係は、家畜囲いや、家畜の糞の堆積、またゲルを建てた痕跡として、そして、ひととひとの関係も、ひとや馬の足跡、車のわだちとして、またひとびとの記憶として、まさに「そこに」刻まれている具体的な交渉の結果である。

しかしながら、ホトアイルについての議論は、それを構成する世帯の理想型を想定していたようにおもわれる。自分の財産としての家畜を持ち、自分の住居としてのゲルに住む核家族が、自分たちの意思により、牧地の状態や所有する家畜の規模・構成に応じて、臨機応変にホトアイルという協働の集団を構成し解消する。ここには、うえにあげた「所有関係」、「経営関係」、「労働関係」、「居住関係」、「親族関係」が、すべてセットとして、ひとつの世帯にまとめられている。これが、牧畜の基本的な社会・経済的単位、あるいは社会主義にいたる前段階での最終的な経営形態として考えられてきた。

「ホトアイル」は、現象そのものというより現象をとらえるためのモデルである。このモデルは、1930年代モンゴルを調査したロシア人のシムコフをはじめとする研究からうまれたとあってよい。そして、その時代の歴史的状況をよく反映している。モンゴルは、1924年に社会主義国になったとはいえ、急激な社会主義化政策はとられなかった。中国における国共合作によって中華連邦が成立すれば、モンゴルもそこに加盟することになっていたからである。しかし、1927年の国共分裂後、1920年代末からは、一転して急進的な社会主義化政策が強行され、牧畜の集団化もおこなわれたが、大規模な国外への集団逃亡や反乱という事態をひきおこした。そこで、旧領主たちや寺院所有の家畜の没収を継続する一方で、国内経済の急激な落ち込みとモンゴルの特殊事情を理由に、ソ連のネッブ時代において農民の個人による経済活動をみとめたように、牧畜の個人経営をみとめた。このような牧畜政策は、第2次世界大戦時の戦時経済を経て、中国や東欧で農業の集団化がおこなわれる1950年代までつづけられ、「個人経営者の時代」と名づけられている。

さらにいえば、清朝は、兵役など国家への貢租賦役をきちんと負担できるような、封建貴族から経済的にも独立した自己経営の牧民（sumny ard）の育成に留意していた。「所有関係」、「経営関係」、「労働関係」、「居住関係」が、すべてひとつの世帯だけに集約していれば、だれにも隷属することなく自由にホトアイルを構成できる。ホトアイルには、封建的隷属から開放されて、国家と皇帝にのみ義務を負う自由民の平等で自由な協働というイメージが反映している。

このような歴史的条件のなかで、ホトアイルというモンゴルの牧畜経営のモデルは作られ、ネグデル時代ですら、家畜はネグデルの所有にもかかわらず、ホトアイルが牧畜経営の基礎と位置づけられていた。そして、社会主義がおわったあとのあたらしい時代でも、モデルとしてまたおもてに出てきたのである。

ところが、現在のモンゴルの現実の牧畜形態では、そのような理想型のホトアイルは、当然ながらも存在しない。それどころか、理想型として機能するかもあやしいほど、さまざまな関係が、複雑にからみあいホトアイルは構成されている。たとえば、ひとつの世帯のなかでさえ、「所有関係」と「経営関係」は一致せず、うえでも述べたように、ちかしい親族や友人所有の家畜を、自分たちの家畜といっしょに飼っているのがふつうだ。最近では、自分の家畜をほとんどもたず、他人のヒツジを金銭で請け負うものも出てきている。

また、定住地にいる親族が、あずけた家畜の管理のために、月に何日という取り決めて家族のなかから羊番をおくって、労働力を供給することもある。この場合、定住地からやってきた羊番には、家畜の経営に関して決定権はほとんどなく、ホストのゲルに居候して、そこの主人のいうとおりに仕事をこなす。つまり、この羊番には、ホトアイルに対して、「所有関係」と「労働関係」はあるが、「経営関係」と「居住関係」は非常に希薄だといえる。

「居住関係」についていえば、そもそも定住地に「本来のゲル」、つまり生活の根拠地があり、ホトアイルには、小さい仮のゲルを建てて、出張のようなかたちで、家畜の世話をする世帯もある。いわば、社会主義時代にモンゴルでも目標とされていた職住分離が、ここに達成されているわけである。また、複数のゲルが一般のホトアイルと同じようにちかくに建てられてあるのに、「所有関係」、「経営関係」、「労働関係」は、まったく分離されている世帯も見出される。

さらには、複数のゲルではなく、ひとつのゲルだけ、つまり単独の世帯で宿営することも、実際には割合として非常におおい。本来のホトアイルの定義からすれば、そのような場合は、ホトアイルとは呼べないのだが、やはりさまざまな「所有関係」や「労働関係」がそこに束ねられていることから、おなじ原理で説明できるし、そうする必要がある。

理想型の牧畜世帯像にしばられずに、さらにあたらしい関係性の組み合わせを模索する、あるいは、一こちらのほうがより真実にちかひように思われるのだが—、機会主義的な経営によって意図せずにそのような状況になっている現在の状況は、いまのところ、選択肢をふやし牧畜経営の自由度を高めているようにみえる。

こういった現実の牧畜経営をとらえるにあたって、状況にあわせ臨機応変に、もともと個別の関係を束ねたり、分離するという原理をしめす用語として、ホトアイルを規定しなおすことは有効だろう。

おわりに —ネゴシエーションのプロセスそのものとしての「ホトアイル」—

もちろん、さまざまな関係の組み合わせは、「主体」どうしの多様なネゴシエーションによるものである。世帯で飼っている家畜の例をとれば、おおくの場合、定住地に住む親兄弟といったちかしい人間の家畜ばかりでなく、友人や単なる知り合いの所有する家畜もそのなかに混ざっているということはすでにのべた。それぞれに、その家畜を飼うことになったきっかけ、報酬の取り決めなどネゴシエーションの過程があったはずである。また、複数の世帯がひとつのホトアイルをつくるにいたった経緯があるはずである。

しかしながら、ホトアイルをそういった事前の交渉の「結果」としてとらえるより、むしろ、現場でおこっているひとと土地、ひとと家畜、ひととひとのあいだのネゴシエーションの過程そのものとしてとらえることが重要だろう。ネゴシエーションとは、状況にあわせある関係をほかの関係とむすびつけあるいはきりはなすことだからだ。

参考文献

- 風戸 真里 2002 「モンゴル国の地方に暮らす人々の遊牧と定住をめぐる移動と世帯間協力—ドンドゴビ県デレン郡の一族の生活史を中心に—」『リトルワールド研究報告』18。
- 杉島 敬志 1999a 「土地・身体・文化の所有」杉島（編）1999 pp.11-52。
- 1999b 「所有をめぐる歴史をもつれあい—アジア・太平洋地域における土地所有を中心に—」比較史研究会第1回研究会「所有をめぐる比較の試み」報告1999年6月26日レジュメ。
http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~5jimu/reports/PDF/Pf_sugishima.pdf
- 杉島 敬志（編）1999 『土地所有の政治史』風響社。
- 松井 健 1998a 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体—」篠原徹（編）『民俗の技術』朝倉書房 pp.247-268。
- 1998b 「文化学 of 脱=構築—琉球弧からの視座—」榕樹書林。
- 2004 「マイナー・サブシステムと環境のハビトゥス化」松井健（編）2004 『沖縄列島—シマの自然と伝統のゆくえ』島の生活世界と開発3 東京大学出版会 pp.103-126。
- 水島 司 1999 「空間の切片」杉島（編）1999 pp.443-456。
- 家中 茂 2001 「石垣島白保のイノ—新石垣空港建設計画をめぐる—」井上真・宮内泰介（編）2001 『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える—』鳥越皓之<企画編集>シリーズ環境社会学（二）新曜社 pp.120-141。
- 2002 「生成するコモンズ—環境社会学におけるコモンズ論の展開—」松井健（編）2002 『開発と環境の文化学—沖縄地域社会変動の諸契機—』榕樹書林 pp.81-112。

Behnke, R.H., Scoones, I. 1993 Rethinking Range Ecology: Implications for Rangeland Management in Africa. In Behnke et al.

- (eds) 1993, pp.1-30.
- Behnke, R.H., Scoones, I. and Kerven, C.(eds) 1993 *Range Ecology at Disequilibrium: New Models of Natural Variability and Pastoral Adaption in African Savanas*, London: ODI.
- Ellis J.E., Coughenour, M. B. and Swift, D. M. 1993 Climate Variability, Ecosystem Stability, and the Implications for Range and Livestock Development. In Behnke et al. (eds) 1993, pp.31-41.
- Fernandez-Gimenez, M.1999 Reconsidering the Role of Absentee Herd Owners: A View from Mongolia. *Human Ecology* 27 (1) :1-27.
- 2002 Spatial and Social Boundaries and the Paradox of Pastoral Land Tenure: A Case Study from Postsocialist Mongolia. *Human Ecology* 30 (1) :49-78.
- Mearns, R.1996 Community, collective action and common grazing: the case of post-socialist Mongolia. *Journal of Development Studies* 32 (3) : 297-33
- Mearns, R., M. Leach and I. Scoones 1998 The Institutional Dynamics of Community-Based Natural Resource Management: An Entitlements Approach. Presented at "Crossing Boundaries," the seventh annual conference of the International Association for the Study of Common Property, Vancouver, British Columbia, Canada, June 10-14, 1998.
- World Bank 2003 *Land Resources and Their Management: Mongolia environment monitor 2003*.

註

- 1) 社会主義時代の牧畜協同組合。牧畜の集団化は、1920年代末に強行されるが失敗した。1940年代後半からおこなわれた集団化は、1959年に完了宣言がだされた。1990年代はじめに解体され、資産、家畜は組合員に分配された。
- 2) その中心となっているのは、世界銀行である。See World Bank 2003.
- 3) "nomadic herding camp" と英訳されるモンゴルの牧畜の基本的な社会・経済的単位。
- 4) 現場では、多くの場合、条文にある「ホトアイル」を、「世帯」あるいは「世帯主」に読みかえている。また、国際機関の「コミュニティ」モデルが、土地法に実際に反映されたのか、それならどうされたのかについて、中間にあるさまざまなネゴシエーションの過程が今後検討されなければならないだろう。ちなみに所有の法的主体を集団とするのは、社会主義法の特徴でもある。
- 5) この「非均衡的エコシステム」も、「コミュニティを基盤にした土地利用管理」と同じく、世銀が中心となって新しいモデルとして提唱しているが、モンゴルではアカデミックな分野においてさえも浸透しているとはいえない。World Bank 2003.

西南アジア遊牧民と国家

——パシュトゥーンの歴史体験をめぐって——

松井 健（東京大学東洋文化研究所・教授）

1 今なぜ西南アジア遊牧民か

遊牧民の研究は、ともすれば、産業化された高度情報社会の状況からとり残された、いわば特殊な前近代的な遺制についての好事家的な関心によるものと考えられがちである。それは、しばしば、月の砂漠とラクダのキャラバン、あるいは、青い空と草原と白いテントという観光イメージによって喚起されるロマンチックなもので彩られているかのごとく、想定されるかもしれない。しかし、遊牧民こそは、今日のグローバリズムへの動きがもはや大勢として動かしがたいものとみなされる、まさにその時点において、国家の辺縁にあって、国家がそのとり込み到最后の努力を傾ける対象であって、その「国民化」のターゲットとなった遊牧民たちは、その存在をかけて、国家の政策に抗するか、あるいは自ら適応を試みているようにみえる。それは、重く過去を引きずった、今日の問題である。

そして、この遊牧民のおかれた現代の状況は、第三者から同情をもって要約されることを拒む、きわめて多様なあり方を呈しており、現状よりもより錯綜した歴史的な経緯を知らなければ、おおよそ理解の仕様もないものであるといつてよい。西南アジアは、イランとインドの間にあって、国家という単位でみても様々なかたちで近代化し、その一方でイスラームを国家の法的宗教的基盤におく度合いによって反近代を内在化させている。一概に、西欧近代を進歩の尺度とはしていないにしても、独特の文明についての尺度をもっており、今日においては、遊牧民という存在に対しては、西欧化を容認する側の進歩発展のイメージからも、イスラームを政治の原則におくことを主張する人たちからも、否定的な意味づけしかおこなわれないといつてよい。

しかし、すでに王制時代に遊牧民を完全に定着化させたイランにおいても、また、遊牧民への関与を組織的系統的におこないえていないパキスタンにおいても、一度国家という組織そのものが全壊してしまったアフガニスタンにおいても、過去において遊牧民は大きな歴史的役割を担い、地域の現在の政治的編成について、大きな痕跡を残している。とはいえ、その歴史的な役割というのは、西南アジアにおける国家の隆盛、植民地勢力との協力、あるいは逆に、植民地勢力との対立、反抗、駆逐と独立の力動といった、出来事の歴史のスポットのなかで大きな意味を担ったというだけで強調されるべきものではない。一貫して明快な、遊牧民という存在のかたちが、近代的な意味での国家の成立、あるいはその隆盛ととりむすんできたきわめて複雑な関係の連続的な相のなかで理解されなくてはならないことは、いうまでもないであろう。

遊牧という生業システムは、移動性という空間とのかかわりを一つの軸とし、もうひとつの軸に、生業としての牧畜を据えて成立していることはいうまでもない。広い牧野、それも遠く離れた複数の牧野を用い、かつ、その間を定期的あるいは季節的に行き来するため、空間とのかかわりは、つねにいささかではあれ政治的なならざるをえなかった。ローカルな政治組織が遊牧民の牧野の使用と移動の行程の安全を保障してくれるほどに安定した権力を行使しようときには、遊牧民はこのローカルな権力構造との折衝をしなくてはならず、政治的という形容は、この折衝の性格を示すものとなる。

しかし、ローカルな政治的組織が十分に機能せず、名目的なものとなるような状況が、西南アジア地方全域で、けっしてまれではなかったことは、今もアル・カーイダが潜伏しているとされるパキスタンの辺境山